

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

本学では、次のとおり教育課程編成・実施の方針を定めています。

■大学

(1) 全学共通科目

- ・コア科目である「仏教」「女性」科目群を中心に、自己と他者を理解し、他者との協働を通して自己実現を果たすために必要な知識と技能を育成する。
- ・4年間の学修の基礎となるスキルを修得する初年次教育、並びに将来に向けての学びの計画づくりを可能にするキャリア教育を行う。
- ・「ドアーズ」科目群を中心に、社会の中で学び、活動する自己のイメージを形成し、積極性、自発性を育成するとともに、生涯学び続ける意欲を促す。

(2) 学科専攻科目

- ・必修科目、必修選択単位の設定によって、体系的な学修を促す。

【教育方法】

- ① 教育課程の体系を示すために、ナンバリング（各科目の関連や難易度を表す番号を与えること）を行い、教育課程の構造を分かりやすく明示する。
- ② 授業形態には「講義」、「演習」、「実験」、「実習」、「実技」があり、それぞれに適正な授業時間と授業外学習を定める。
- ③ 学生が十分な学修時間を確保し、学びの質を高めるために、履修登録単位上限（CAP 制）を設ける。
- ④ 各科目はそれぞれの授業内容にあった受講人数を考慮したクラス編成とし、学生が主体的かつ能動的に、また時には協働して学ぶことを支援する。
- ⑤ 各科目が担う DP を達成するための「到達目標」を定め、授業計画をシラバスに明記することで、学生の目的意識を喚起し、計画的な学修を促す。
- ⑥ 学生の授業理解度を確認し、授業の質的向上を担保するために学生による授業評価を活用する。
- ⑦ 学生の習熟度を明確化し、個々の学生のニーズを踏まえた学生指導を行うために学生ポートフォリオを活用する。

【学修成果の評価】

- ① 各科目の到達目標とその達成度を測るための成績評価基準を予め設定し、これに基づいて厳正な成績評価を行う。
- ② 成績評価は、秀・優・良・可・不可の5段階で行い、可以上を合格とする。
- ③ 通算の成績評価の指標として、GPA（Grade Point Average）を用いる。
- ④ 成績評価は、試験・レポート・成果発表等により行う。各科目の評価方法（評価種別ごとの割合）と成績評価基準は、予めシラバスに明記して周知する。

● 日本語・日本文学科

【教育内容】

(1) 全学共通科目

- ・コア科目である「仏教」「女性」科目群を中心に、自己と他者を理解し、他者との協働を通して自己実現を果たすために必要な知識と技能を育成する。
- ・4年間の学修の基礎となるスキルを修得する初年次教育、並びに将来に向けての学びの計画づくりを可能にするキャリア教育を行う。
- ・「ドアーズ」科目群を中心に、社会の中で学び、活動する自己のイメージを形成し、積極性、自発性を育成するとともに、生涯学び続ける意欲を促す。

(2) 学科専攻科目

- ・必修科目、必修選択単位の設定によって、体系的な学修を促す。
- ・文学部共通に多文化共生科目群を設定し、多様な文化的背景や価値観への理解に基づいて、他者を尊重し協働することができる力を養う。
- ・「日本語学」、「日本文学」、「日本文化」、「現代コミュニケーション」の各科目群で学修した知識をもとに、言葉に対する感性を磨き、表現力・分析力・企画力など、様々なメディアに対応する独創的かつ実践的なコミュニケーション力を養う。あわせて、様々な文化的背景や価値観に対する理解に基づいて、他者を尊重し協働できる力を養う。
- ・4年間の教育内容の統合と総合化のために、卒業論文を必修とする。

【教育方法】

- ① 教育課程の体系を示すために、ナンバリング（各科目の関連や難易度を表す番号を与えること）を行い、教育課程の構造を分かりやすく明示する。
- ② 授業形態には「講義」、「演習」、「実験」、「実習」、「実技」があり、それぞれに適正な授業時間と授業外学習を定める。
- ③ 学生が十分な学修時間を確保し、学びの質を高めるために、履修登録単位上限（CAP 制）を設ける。
- ④ 各科目はそれぞれの授業内容にあった受講人数を考慮したクラス編成とし、学生が主体的かつ能動的に、また時には協働して学ぶことを支援する。
- ⑤ 各科目が担う DP を達成するための「到達目標」を定め、授業計画をシラバスに明記することで、学生の目的意識を喚起し、計画的な学修を促す。
- ⑥ 学生の授業理解度を確認し、授業の質的向上を担保するために学生による授業評価を活用する。
- ⑦ 学生の習熟度を明確化し、個々の学生のニーズを踏まえた学生指導を行うために学生ポートフォリオを活用する。
- ⑧ 学科専攻科目を、基礎科目（1年）、基幹科目（1、2年）、発展科目（3、4年）に分け、学年配当に応じた段階的な学修を促す。
基礎科目は、主として「日本文学」、「日本語学」の基礎的知識と技能の修得のため、必修とする。
- ⑨ 「日本語学」、「日本文学」、「日本文化」、「現代コミュニケーション」の各区分ごとの構造的、体系的な学修を促す。そのため、各分野で学修に著しい偏りがないように、必修選択単位修得数の下限を設ける。
- ⑩ 演習科目を重視し、課題を発見し、考察結果を発表・議論する過程を通して、情報収集と分析、論理的思考、問題解決力、実践的表現力などを総合的に育成する。

【学修成果の評価】

- ① 各科目の到達目標とその達成度を測るための成績評価基準を予め設定し、これに基づいて厳正な成績評価を行う。
- ② 成績評価は、秀・優・良・可・不可の5段階で行い、可以上を合格とする。
- ③ 通算の成績評価の指標として、GPA (Grade Point Average) を用いる。
- ④ 成績評価は、試験・レポート・成果発表等により行う。各科目の評価方法（評価種別ごとの割合）と成績評価基準は、予めシラバスに明記して周知する。

●英語学科

【教育内容】

(1) 全学共通科目

- ・コア科目である「仏教」「女性」科目群を中心に、自己と他者を理解し、他者との協働を通して自己実現を果たすために必要な知識と技能を育成する。
- ・4年間の学修の基礎となるスキルを修得する初年次教育、並びに将来に向けての学びの計画づくりを可能にするキャリア教育を行う。
- ・「ドアーズ」科目群を中心に、社会の中で学び、活動する自己のイメージを形成し、積極性、自発性を育成するとともに、生涯学び続ける意欲を促す。

(2) 学科専攻科目

- ・必修科目、必修選択単位の設定によって、体系的な学修を促す。
- ・文学部共通に多文化共生科目群を設定し、多様な文化的背景や価値観への理解に基づいて、他者を尊重し協働することができる力を養う。
- ・「ECP (English Communication Program)」、「英語学・英語圏文学／文化」、「異文化理解」、「ツーリズム」、「言語教育」の各科目群で学修した知識をもとに、英語4技能を基盤とした英語運用力を養い、「英語で学ぶ」という方針のもと、多様な社会・文化の中で英語力を活かしながら他者と協働できる力を養う。
- ・「ECP」の各科目では、英語4技能の基礎からの徹底した学修をもとに、日常的なコミュニケーションやビジネスの場での実践に即した形で学ぶ演習を通して、適切なコミュニケーション力、読解力、作文力など、使える英語力を養う。
- ・4年間の教育内容の統合と総合化のために、卒業ゼミナールを必修とする。

【教育方法】

- ① 教育課程の体系を示すために、ナンバリング (P45: 各科目の関連や難易度を表す番号を与えること) を行い、教育課程の構造を分かりやすく明示する。
- ② 授業形態には「講義」、「演習」、「実験」、「実習」、「実技」があり、それぞれに適正な授業時間と授業外学習を定める。
- ③ 学生が十分な学修時間を確保し、学びの質を高めるために、履修登録単位上限 (CAP 制) を設ける。
- ④ 各科目はそれぞれの授業内容にあった受講人数を考慮したクラス編成とし、学生が主体的かつ能動的に、また時には協働して学ぶことを支援する。
- ⑤ 各科目が担う DP を達成するための「到達目標」を定め、授業計画をシラバスに明記することで、学生の目的意識を喚起し、計画的な学修を促す。
- ⑥ 学生の授業理解度を確認し、授業の質的向上を担保するために学生による授業評価を活用する。
- ⑦ 学生の習熟度を明確化し、個々の学生のニーズを踏まえた学生指導を行うために学生ポートフォリオを活用する。
- ⑧ 1・2年次では、個々の学生が自分の英語力に応じた環境での指導を受けることができるよう、プレースメントテスト結果に基づく能力別少人数クラス編成のうえ授業を実施する。
- ⑨ 「英語を学ぶ」ことに加えて「英語で学ぶ」という視点にも配慮しながら、「異文化理解」関連科目を中心に、正課内外において、外国人とのコミュニケーションの機会を取り入れ、英語運用力の実践とともに、様々な文化・社会に生きる人たちの多様な価値観に触れることができる機会を設ける。
- ⑩ ツーリズムの分野において、航空関連業と観光業に関連した英語表現に加え、業界に関する知識を図る。

【学修成果の評価】

- ① 各科目の到達目標とその達成度を測るための成績評価基準を予め設定し、これに基づいて厳正な成績評価を行う。
- ② 成績評価は、秀・優・良・可・不可の5段階で行い、可以上を合格とする。
- ③ 通算の成績評価の指標として、GPA (Grade Point Average) を用いる。
- ④ 成績評価は、試験・レポート・成果発表等により行う。各科目の評価方法 (評価種別ごとの割合) と成績評価基準は、予めシラバスに明記して周知する。
- ⑤ スキル系の科目群 (発音、会話、プレゼンテーション等) においては、科目ごとの到達目標に基づいた実技試験などを実施するなどして、科目の特質に沿った評価方法を行う。
- ⑥ 英語学科主催の海外語学研修 (事前・事後研修を含む) について、規定に基づいて単位認定を行う。

●アジア文化学科

【教育内容】

(1) 全学共通科目

- ・コア科目である「仏教」「女性」科目群を中心に、自己と他者を理解し、他者との協働を通して自己実現を果たすために必要な知識と技能を育成する。
- ・4年間の学修の基礎となるスキルを修得する初年次教育、並びに将来に向けての学びの計画づくりを可能にするキャリア教育を行う。
- ・「ドアーズ」科目群を中心に、社会の中で学び、活動する自己のイメージを形成し、積極性、自発性を育成するとともに、生涯学び続ける意欲を促す。

(2) 学科専攻科目

- ・必修科目、必修選択単位の設定によって、体系的な学修を促す。
- ・文学部共通に多文化共生科目群を設定し、多様な文化的背景や価値観への理解に基づいて、他者を尊重し協働することができる力を養う。
- ・「言語」「社会」「文化」の3領域で学修した知識をもとに、高度なコミュニケーション力を養い、アジアの多様な社会事情、文化について体験的に理解を深め、国際共生社会の実現のために、他者を尊重し協働できる力を養う。
- ・4年間の教育内容の統合と総合化のために、卒業ゼミナールを必修とする。

【教育方法】

- ① 教育課程の体系を示すために、ナンバリング（P55：各科目の関連や難易度を表す番号を与えること）を行い、教育課程の構造を分かりやすく明示する。
- ② 授業形態には「講義」、「演習」、「実験」、「実習」、「実技」があり、それぞれに適正な授業時間と授業外学習を定める。
- ③ 学生が十分な学修時間を確保し、学びの質を高めるために、履修登録単位上限（CAP 制）を設ける。
- ④ 各科目はそれぞれの授業内容にあった受講人数を考慮したクラス編成とし、学生が主体的かつ能動的に、また時には協働して学ぶことを支援する。
- ⑤ 各科目が担う DP を達成するための「到達目標」を定め、授業計画をシラバスに明記することで、学生の目的意識を喚起し、計画的な学修を促す。
- ⑥ 学生の授業理解度を確認し、授業の質的向上を担保するために学生による授業評価を活用する。
- ⑦ 学生の習熟度を明確化し、個々の学生のニーズを踏まえた学生指導を行うために学生ポートフォリオを活用する。
- ⑧ 学科専攻科目を、基礎科目（1年）、基幹科目（1～4年）、発展科目（3、4年）に分け、学年配当に応じた段階的な学修を促す。
- ⑨ 基礎科目には、アジア各地域入門及びアジア文化基礎ゼミナールを置き、基礎的知識の修得のため、必修とする。
- ⑩ 基幹科目では、言語・社会・文化の各領域に、基本的な視野を身に付けるための科目と、より応用的な内容の科目が置かれている。この3領域を横断的に学ぶことによって視野を広げながら、自身の専門性を選択し探究する。
- ⑪ 語学力を強化するため、スピーチコンテスト、海外大学とのオンライン研修、留学プログラム等、授業内外での仕組みを充実させる。また、留学生と日本人学生との学びあい活動を強化し、異文化理解を深める。
- ⑫ 食文化や音楽・芸術など、体験から学ぶ実践授業を重視する。

【学修成果の評価】

- ① 各科目の到達目標とその達成度を測るための成績評価基準を予め設定し、これに基づいて厳正な成績評価を行う。
- ② 成績評価は、秀・優・良・可・不可の5段階で行い、可以上を合格とする。
- ③ 通算の成績評価の指標として、GPA (Grade Point Average) を用いる。
- ④ 成績評価は、試験・レポート・成果発表等により行う。各科目の評価方法（評価種別ごとの割合）と成績評価基準は、予めシラバスに明記して周知する。
- ⑤ 海外語学研修（事前・事後研修を含む）について、規定に基づいて単位認定を行う。

●人間科学科 心理・社会福祉専攻 心理コース

【教育内容】

(1) 全学共通科目

- ・コア科目である「仏教」「女性」科目群を中心に、自己と他者を理解し、他者との協働を通して自己実現を果たすために必要な知識と技能を育成する。
- ・4年間の学修の基礎となるスキルを修得する初年次教育、並びに将来に向けての学びの計画づくりを可能にするキャリア教育を行う。
- ・「ドアーズ」科目群を中心に、社会の中で学び、活動する自己のイメージを形成し、積極性、自発性を育成するとともに、生涯学び続ける意欲を促す。

(2) 学科専攻科目

- ・必修科目、必修選択単位の設定によって、体系的な学修を促す。
- ・学年ごとに「理論⇒演習⇒実習⇒考察」サイクルを基本とした科目を段階的に配置し、自己・他者理解を深め、心理学的支援を可能とする資質・技能の向上を図る。
- ・自己のキャリア選択に関する科目を段階的に配置することで、卒業後の進路について具体的に計画できるよう促す。
- ・心理・社会福祉専攻の強みを活かし、心理的援助と社会福祉的援助の双方を学ぶ演習及び副専攻を設置し、多職種連携を視野に入れた多面的な援助方法を身に付けた専門職を育成する。
- ・4年間の教育内容の統合と総合化のために、卒業ゼミナールを必修とする。

【教育方法】

- ① 教育課程の体系を示すために、ナンバリング（P65：各科目の関連や難易度を表す番号を与えること）を行い、教育課程の構造を分かりやすく明示する。
- ② 授業形態には「講義」、「演習」、「実験」、「実習」、「実技」があり、それぞれに適正な授業時間と授業外学習を定める。
- ③ 学生が十分な学修時間を確保し、学びの質を高めるために、履修登録単位上限（CAP 制）を設ける。
- ④ 各科目はそれぞれの授業内容にあった受講人数を考慮したクラス編成とし、学生が主体的かつ能動的に、また時には協働して学ぶことを支援する。
- ⑤ 各科目が担う DP を達成するための「到達目標」を定め、授業計画をシラバスに明記することで、学生の目的意識を喚起し、計画的な学修を促す。
- ⑥ 学生の授業理解度を確認し、授業の質的向上を担保するために学生による授業評価を活用する。
- ⑦ 学生の習熟度を明確化し、個々の学生のニーズを踏まえた学生指導を行うために学生ポートフォリオを活用する。
- ⑧ 講義科目において基本的な知識を学んだうえ、演習科目でその知識を自己理解及び他者理解、心理学的支援の実践に適用する上で必要となる技能を身に付けるための授業を展開する。
- ⑨ 講義で修得した知識・技能の日常生活及び心理臨床現場への適用について、演習・実習科目における体験活動を通して指導する。卒業までに各学生が取り組むべき課題を明確にし、その課題について指導・助言を行う。

【学修成果の評価】

- ① 各科目の到達目標とその達成度を測るための成績評価基準を予め設定し、これに基づいて厳正な成績評価を行う。
- ② 成績評価は、秀・優・良・可・不可の5段階で行い、可以上を合格とする。
- ③ 通算の成績評価の指標として、GPA (Grade Point Average) を用いる。
- ④ 成績評価は、試験・レポート・成果発表等により行う。各科目の評価方法（評価種別ごとの割合）と成績評価基準は、予めシラバスに明記して周知する。
- ⑤ 心理実習に関連する科目の評価を行う際には、実習先が行う評価を加味する。ただし、実習先によって実際の評価には温度差があるため、教員が必要な調整を行ったうえ評価を実施する。

●人間科学科 心理・社会福祉専攻 社会福祉コース

【教育内容】

(1) 全学共通科目

- ・コア科目である「仏教」「女性」科目群を中心に、自己と他者を理解し、他者との協働を通して自己実現を果たすために必要な知識と技能を育成する。
- ・4年間の学修の基礎となるスキルを修得する初年次教育、並びに将来に向けての学びの計画づくりを可能にするキャリア教育を行う。
- ・「ドアーズ」科目群を中心に、社会の中で学び、活動する自己のイメージを形成し、積極性、自発性を育成するとともに、生涯学び続ける意欲を促す。

(2) 学科専攻科目

- ・必修科目、必修選択単位の設定によって、体系的な学修を促す。
- ・学年ごとに「理論⇒演習⇒実習⇒考察」サイクルを基本とした科目を段階的に配置し、ソーシャルワーカーとしての資質・技能の向上を図る。
- ・心理・社会福祉専攻の強みを活かし、心理的援助と社会福祉的援助の双方を学ぶ演習及び副専攻を設置し、多職種連携を視野に入れた多面的な援助方法を身に付けた専門職を育成する。
- ・4年間の教育内容の統合と総合化のために、卒業ゼミナールを必修とする。

【教育方法】

- ① 教育課程の体系を示すために、ナンバリング（P75：各科目の関連や難易度を表す番号を与えること）を行い、教育課程の構造を分かりやすく明示する。
- ② 授業形態には「講義」、「演習」、「実験」、「実習」、「実技」があり、それぞれに適正な授業時間と授業外学習を定める。
- ③ 学生が十分な学修時間を確保し、学びの質を高めるために、履修登録単位上限（CAP 制）を設ける。
- ④ 各科目はそれぞれの授業内容にあった受講人数を考慮したクラス編成とし、学生が主体的かつ能動的に、また時には協働して学ぶことを支援する。
- ⑤ 各科目が担う DP を達成するための「到達目標」を定め、授業計画をシラバスに明記することで、学生の目的意識を喚起し、計画的な学修を促す。
- ⑥ 学生の授業理解度を確認し、授業の質的向上を担保するために学生による授業評価を活用する。
- ⑦ 学生の習熟度を明確化し、個々の学生のニーズを踏まえた学生指導を行うために学生ポートフォリオを活用する。
- ⑧ 講義科目において基本的な知識を学んだうえ、演習科目でその知識をソーシャルワーク実践に適用する上で必要となる技能を身に付けるための授業を展開する。
- ⑨ 講義・演習で修得した知識・技能を実際のソーシャルワーク現場で実践する実習科目において、事前指導⇒実習⇒事後指導を展開する。実習後は、卒業までに各学生が取り組むべき課題を明確にし、その課題について実習後に配置する演習科目でも指導を行う。

【学修成果の評価】

- ① 各科目の到達目標とその達成度を測るための成績評価基準を予め設定し、これに基づいて厳正な成績評価を行う。
- ② 成績評価は、秀・優・良・可・不可の5段階で行い、可以上を合格とする。
- ③ 通算の成績評価の指標として、GPA (Grade Point Average) を用いる。
- ④ 成績評価は、試験・レポート・成果発表等により行う。各科目の評価方法（評価種別ごとの割合）と成績評価基準は、予めシラバスに明記して周知する。
- ⑤ 社会福祉実習に関連する科目の評価を行う際には、実習先が行う評価を加味する。ただし、実習先によって実際の評価には温度差があるため、教員が必要な調整を行ったうえ評価を実施する。

●人間科学科 初等教育・保育専攻 初等教育コース

【教育内容】

(1) 全学共通科目

- ・コア科目である「仏教」「女性」科目群を中心に、自己と他者を理解し、他者との協働を通して自己実現を果たすために必要な知識と技能を育成する。
- ・4年間の学修の基礎となるスキルを修得する初年次教育、並びに将来に向けての学びの計画づくりを可能にするキャリア教育を行う。
- ・「ドアーズ」科目群を中心に、社会の中で学び、活動する自己のイメージを形成し、積極性、自発性を育成するとともに、生涯学び続ける意欲を促す。

(2) 学科専攻科目

- ・必修科目、必修選択単位の設定によって、体系的な学修を促す。
- ・「理論⇒演習⇒実習⇒省察」サイクルを基本とした科目の構造‘Step up カリキュラム’を設定し、教育者としての資質・能力の向上を図る。
- ・学生個々の関心に基づく選択的履修モデル‘5 Stream 科目群’（心理、情操、ICT、特別支援教育、英語）を設定し、教育者としての基盤を構築する。
- ・3年次科目「人間科学プレゼミナール」を必修とし、主体的に課題を見出しその解決を図る探究能力を育成する。
- ・4年間の教育内容の統合と総合化のために、卒業ゼミナールを必修とする。

【教育方法】

- ① 教育課程の体系を示すために、ナンバリング（P85：各科目の関連や難易度を表す番号を与えること）を行い、教育課程の構造を分かりやすく明示する。
- ② 授業形態には「講義」、「演習」、「実験」、「実習」、「実技」があり、それぞれに適正な授業時間と授業外学習を定める。
- ③ 学生が十分な学修時間を確保し、学びの質を高めるために、履修登録単位上限（CAP 制）を設ける。
- ④ 各科目はそれぞれの授業内容にあった受講人数を考慮したクラス編成とし、学生が主体的かつ能動的に、また時には協働して学ぶことを支援する。
- ⑤ 各科目が担う DP を達成するための「到達目標」を定め、授業計画をシラバスに明記することで、学生の目的意識を喚起し、計画的な学修を促す。
- ⑥ 学生の授業理解度を確認し、授業の質的向上を担保するために学生による授業評価を活用する。
- ⑦ 学生の習熟度を明確化し、個々の学生のニーズを踏まえた学生指導を行うために学生ポートフォリオを活用する。
- ⑧ 基本的な教育技術や教科の特性に応じた指導法が身に付くよう、「初等教科教育法（各教科）」の授業では、学生による模擬授業を実施し、教員が専門的な立場から指導・助言を行う。
- ⑨ 教育現場の実際に学ぶ実習の成果を確かなものとするため、実習前指導や事後指導、実習中の指導（実習訪問）等を実施し、個々の学生の状況や課題に応じた指導を行う。

【学修成果の評価】

- ① 各科目の到達目標とその達成度を測るための成績評価基準を予め設定し、これに基づいて厳正な成績評価を行う。
- ② 成績評価は、秀・優・良・可・不可の5段階で行い、可以上を合格とする。
- ③ 通算の成績評価の指標として、GPA (Grade Point Average) を用いる。
- ④ 成績評価は、試験・レポート・成果発表等により行う。各科目の評価方法（評価種別ごとの割合）と成績評価基準は、予めシラバスに明記して周知する。
- ⑤ 教育実習に関連する科目の評価を行う際には、実習先が行う評価を加味する。ただし、科目の評価全体に占める割合は40%を超えない範囲とする。

●人間科学科 初等教育・保育専攻 幼児保育コース

【教育内容】

(1) 全学共通科目

- ・コア科目である「仏教」「女性」科目群を中心に、自己と他者を理解し、他者との協働を通して自己実現を果たすために必要な知識と技能を育成する。
- ・4年間の学修の基礎となるスキルを修得する初年次教育、並びに将来に向けての学びの計画づくりを可能にするキャリア教育を行う。
- ・「ドアーズ」科目群を中心に、社会の中で学び、活動する自己のイメージを形成し、積極性、自発性を育成するとともに、生涯学び続ける意欲を促す。

(2) 学科専攻科目

- ・必修科目、必修選択単位の設定によって、体系的な学修を促す。
- ・「理論⇒演習⇒実習⇒省察」サイクルを基本とした科目の構造‘Step up カリキュラム’を設定し、保育者としての資質・能力の向上を図る。
- ・学生個々の関心に基づく選択的履修モデル‘5 Stream 科目群’（心理、情操、ICT、特別支援教育、英語）を設定し、保育者としての基盤を構築する。
- ・3年次科目「人間科学プレゼミナール」を必修とし、主体的に課題を見出しその解決を図る探究能力を育成する。
- ・4年間の教育内容の統合と総合化のために、卒業ゼミナールを必修とする。

【教育方法】

- ① 教育課程の体系を示すために、ナンバリング（P95：各科目の関連や難易度を表す番号を与えること）を行い、教育課程の構造を分かりやすく明示する。
- ② 授業形態には「講義」、「演習」、「実験」、「実習」、「実技」があり、それぞれに適正な授業時間と授業外学習を定める。
- ③ 学生が十分な学修時間を確保し、学びの質を高めるために、履修登録単位上限（CAP 制）を設ける。
- ④ 各科目はそれぞれの授業内容にあった受講人数を考慮したクラス編成とし、学生が主体的かつ能動的に、また時には協働して学ぶことを支援する。
- ⑤ 各科目が担う DP を達成するための「到達目標」を定め、授業計画をシラバスに明記することで、学生の目的意識を喚起し、計画的な学修を促す。
- ⑥ 学生の授業理解度を確認し、授業の質的向上を担保するために学生による授業評価を活用する。
- ⑦ 学生の習熟度を明確化し、個々の学生のニーズを踏まえた学生指導を行うために学生ポートフォリオを活用する。
- ⑧ 基本的な保育技術や領域の特性に応じた指導法が身に付くよう、「保育内容演習（各領域）」の授業では、学生による模擬保育を実施し、教員が専門的な立場から指導・助言を行う。
- ⑨ 保育現場の実際に学ぶ実習（施設実習、及び幼稚園における教育実習を含む）の成果を確かなものとするため、実習前指導や事後指導、実習中の指導（実習訪問）等を実施し、個々の学生の状況や課題に応じた指導を行う。

【学修成果の評価】

- ① 各科目の到達目標とその達成度を測るための成績評価基準を予め設定し、これに基づいて厳正な成績評価を行う。
- ② 成績評価は、秀・優・良・可・不可の5段階で行い、可以上を合格とする。
- ③ 通算の成績評価の指標として、GPA（Grade Point Average）を用いる。
- ④ 成績評価は、試験・レポート・成果発表等により行う。各科目の評価方法（評価種別ごとの割合）と成績評価基準は、予めシラバスに明記して周知する。
- ⑤ 保育実習（施設実習、および幼稚園における教育実習を含む）に関連する科目の評価を行う際には、実習先が行う評価を加味する。ただし、科目の評価全体に占める割合は40%を超えない範囲とする。

●現代社会学科

【教育内容】

(1) 全学共通科目

- ・コア科目である「仏教」「女性」科目群を中心に、自己と他者を理解し、他者との協働を通して自己実現を果たすために必要な知識と技能を育成する。
- ・4年間の学修の基礎となるスキルを修得する初年次教育、並びに将来に向けての学びの計画づくりを可能にするキャリア教育を行う。
- ・「ドアーズ」科目群を中心に、社会の中で学び、活動する自己のイメージを形成し、積極性、自発性を育成するとともに、生涯学び続ける意欲を促す。

(2) 学科専攻科目

- ・必修科目、必修選択単位の設定によって、体系的な学修を促す。
- ・社会学及び現代社会の諸問題を理解するための6つの科目領域を設定し、現代社会を複眼的に理解するための基礎知識を育成する。
- ・社会デザイン基礎科目群を設定し、現代社会における諸現象を調査し、結果を分析するための基本的な方法を修得する。
- ・アカデミックスキル修得を目的とするゼミと社会連携活動のためのゼミを4年間連続して開講することで、大学で学んだ知識と社会連携活動によって得た知識とを融合し、社会のニーズに即応しうる実践力を獲得する。
- ・4年間の教育内容の統合と総合化のために、卒業ゼミナールを必修とする。

【教育方法】

- ① 教育課程の体系を示すために、ナンバリング（P105：各科目の関連や難易度を表す番号を与えること）を行い、教育課程の構造を分かりやすく明示する。
- ② 授業形態には「講義」、「演習」、「実験」、「実習」、「実技」があり、それぞれに適正な授業時間と授業外学習を定める。
- ③ 学生が十分な学修時間を確保し、学びの質を高めるために、履修登録単位上限（CAP 制）を設ける。
- ④ 各科目はそれぞれの授業内容にあった受講人数を考慮したクラス編成とし、学生が主体的かつ能動的に、また時には協働して学ぶことを支援する。
- ⑤ 各科目が担う DP を達成するための「到達目標」を定め、授業計画をシラバスに明記することで、学生の目的意識を喚起し、計画的な学修を促す。
- ⑥ 学生の授業理解度を確認し、授業の質的向上を担保するために学生による授業アンケートを活用する。
- ⑦ 学生の習熟度を明確化し、個々の学生のニーズを踏まえた学生指導を行うために学生ポートフォリオを活用する。
- ⑧ 社会の課題を概論的に学びつつ、それを自らの問題として理解するために、SDGs 理解を目指した講義科目群と身近な問題を実践的に学ぶ社会デザイン科目群を設置する。
- ⑨ 社会の中で学び、学びの内容を社会に還元するために、社会デザイン系ゼミで社会への実装を想定した提案型の授業を取り入れる。また上位学年ゼミナールでは、社会連携活動を取り入れた授業を行う。
- ⑩ 社会の諸課題の解決に向けた取り組みの実践者を客員講師として招聘することで、現代社会の実際の問題を身近な問題として学びの中に取り入れる。

【学修成果の評価】

- ① 各科目の到達目標とその達成度を測るための成績評価基準を予め設定し、これに基づいて厳正な成績評価を行う。
- ② 成績評価は、秀・優・良・可・不可の5段階で行い、可以上を合格とする。
- ③ 通算の成績評価の指標として、GPA (Grade Point Average) を用いる。
- ④ 成績評価は、試験・レポート・成果発表等により行う。各科目の評価方法（評価種別ごとの割合）と成績評価基準は、予めシラバスに明記して周知する。
- ⑤ 社会人としての基礎知識や技能の修得度を測る指標として、ゼミ科目のルーブリックを設定する。
- ⑥ 上位学年ゼミにおいては社会連携活動報告会を開催し、その学修成果を成績評価に含める。

■大学院

◆基礎教育科目

〈人間科学コース・臨床心理学コース〉

基礎教育科目は、人間理解と人間支援という視点を統合した本研究科の「人間科学」の基本理念について基礎的な理解を図るとともに、既に身に付けている専門的素養を再認識し、自らの学修目標や研究計画を明確に意識することをねらいとしている。

◆基幹教育科目

〈人間科学コース・臨床心理学コース〉

基幹教育科目は、本研究科における「人間科学」の考え方について、より具体的な視点を示し、人間理解と人間支援の今日的課題を概観することをねらいとしている。

◆専門教育科目

〈人間科学コース〉

専門教育科目は、当該研究分野の各領域を構成する科目で、自らの専門的な知識を深めるとともに、複数の学問的課題の中心に関連性を求め、研究の視点を広げることをねらいとしている。

〈臨床心理学コース〉

専門教育科目は、臨床心理学の理論を学んだり、演習や実習教育を通じて実践力を高めたりする科目で、心理職としての専門性を深めることをねらいとしている。

◆研究指導科目

〈人間科学コース〉

研究指導科目は「研究基礎」にて研究生活に必要な研究スキルを身に付けること、さらに「研究指導Ⅰ」「研究指導Ⅱ」では、一貫した研究指導教員のもと、修士論文の作成へ向けた個人指導を行い、各自の研究計画に基づき、研究課題の明確化、論証性、独自性を追究していくことをねらいとしている。

〈臨床心理学コース〉

「心理学研究法特論」にて研究生活に必要な研究スキルを身に付けること、さらに「研究指導Ⅰ」「研究指導Ⅱ」では、一貫した研究指導教員のもと、修士論文の作成へ向けた個人指導を行い、各自の研究計画に基づき、研究課題の明確化、論証性、独自性を追究していくことをねらいとしている。